

腦部は勿論三人組などが此問題のため莫大な旅費を費消して上京したのはナンのためかと非難の聲が上がって居るとき、燃え上がったのが疑獄事件だ、協會勤務の女子事務員や台所の婦人などの印判を何箇か何十箇かを用ひて毎月架空の人に失業救済金を支拂ふて居る事實を突き止めた末救済會員が憤慨して法庭に一切を持ち込み、三人組の某が豚箱入りの榮譽を擔ふに至り、騒動は大きくなり、文字通り血眼になつて揉み消しに全力を注いだ結果が起訴猶豫と云ふ青天白日の士が絶対に頂戴せぬ烙印を押されてケリとなつた。が、幽靈使ひは此間死物狂ひにアガキ廻り十一會の本營にまで泣きを入れ、常務理事秘書の名の下に其會の有力者を協會に抱き込んだ、十一會はゴ、で完全に協會幹部派の鼎の目方を測定し、爾後組し易き相手と見たかの動き方を見せ多くの會員も亦不徳漢を追ひ出せと迫つたが常務理事は只不正事實なしと嘯き更に真相發表も、疑惑の清掃をも考慮せず、逆に告發者に壓迫を加えるかの如き態度を示した。

濱田氏の所謂組合から分譲される限りある資金を以てしては失業洪水を制止出来るものでなく、救済圏に入り得ない多くの失業者は呪咀の聲を上げて協會に迫り、愈々本格的の需給調節運動を起す事になり七年六月商船學校廢合に關し政府及學校所在地の縣當局を訪問陳情する一方海員大會を開いて氣勢を添えた、勿論十一會系の役員も此の協會案に賛成し陳情運動にも海員大會にも參加した。

此運動は商船學校所在地に非常な脅威を與え學校當局と結び、黨勢を知つて國勢を顧みないソコハカの縣會議員や代議士を説得して商船學校廢すべからずとの運動を企圖しつ、ある時七年七月三人組の某々の主宰で開かれた芝浦の海員大會は理不盡にも同地在泊船乗組みの實習生に強要して其六名を下船せしめた、商船學校當局、及地元有志は此報を得て決然と起ち上がり十一會を鞭撻して協會案と相容れぬ商船學校廢すべからずを基調とする商船教育改革案なるものを押し立て政府當局へ陳情請願し一方議會へ建議案として提出し、茲に協會と十一會との鬭争が展開された。

此間尾崎常務理事は筆禍を買ふて、十一會に釋明し、或は又信認の厚かつた筈の秘書を誠首し、十一會内に於てさへ無能者扱ひを受けて居つた頗るタヨリない男を其代りに雇入れでスパイとして重要し十一會は又、協會を脱して海員組合に加盟を企てたり其他種々のデ